
薔十字の騎士団 —Verweile doch, du bist so schön.—

黒神王輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇十字の騎士団 | Verweile doch, du bist so schön. |

【Nコード】

N5733R

【作者名】

黒神王輝

【あらすじ】

不気味がって、誰も近寄ろうとはしない『魔の森』。危険度の高い魔物が割拠するその道を守る番人——ナハト・メルクーアは現在、人と関わりのない生活を送っていた。だが、親友のマルスに連れられて街に出る事になり、そこから彼の日常が狂いだす。魔術と剣が交錯する、ハイファンタジー。（シリアス寄り）

序幕 『魔の森』と番人

この世界——『アウグラルス』には、七英雄の物語がある。

七人の英雄はそれぞれ、この世界を構成する元素——炎、水、風、雷、土、光、闇を司る精霊と契約を交わし、横行する魔物達を払い、人々に希望を与えた。

魔物の王である大狼——フェンリル・ヴォルフに苦戦しながらも打ち勝ち、人々はその覇権を広げていく。

その後、闇と契約していた英雄一人を除いて、それぞれが六つの国を建てた。

炎精霊を祀る南のシャンバール女王国、水精霊を祀る東のヴェルネツィス王国、風精霊を祀る北のフィンブリア帝国、雷精霊を祀る西のインディレリア王国、土精霊を祀る東の果ての諸島を纏めたジパング連合国。そして、中央には大英雄——アーサー王が建てたとされる、光精霊を祀るクラルティア聖王国がある。

人類は光溢れる世界で生活を営み、繁栄し、いつしか魔物の脅威を皆忘れていった。

五百年前、精霊の力まで借りて終結したあの厄災の足音が迫っているとは、誰も気付かずに。

森を風が優しく通り抜け、木々が風を送り出すかのように揺れる。深い緑が延々と続くその森は、地理を知らぬ人間が迷い込めば確実

に出られなくなってしまう。

魔物も出る事から、通称『魔の森』と人々は忌み嫌っていた。

その森の中で立ち止まる、一人の青年。

体格が良い、筋肉質の逞しい体。太い腕には治り掛けの小さな傷が複数あり、その手にはショートソードにしては長く、ロングソードにしては短い、何とも中途半端な剣が握られていた。

捲くついていた袖を青年は戻して、血の付いた剣を大雑把に布で拭いて鞆に収める。

黒く分厚い材質の上着にズボン、襟の付いた白い簡素なシャツといった服装。首元には細い銀色の鎖に繋がれたプレートがあり、プレートには森を髣髴とさせる模様が刻まれてあった。

顔は整っている。甘い表情が似合いそうなのだが、本人は表情と呼べる表情を浮かべておらず、おまけに好き勝手に伸びている黒髪で顔が隠れているので、見る相手に不気味な印象を与えるだろう。

履き慣れたショートブーツを踏み鳴らして、青年は先程切り捨てた狼のような外見の魔物——ホワイトウルフの屍を見る。

しばらくそうしていたが、青年は溜息を一つ吐くと、ベルトに差し込んであった大きなナイフでウルフを解体していく。

食べれる部分とそうでない部分を分別し、不要な部分は適当に埋めていく。

その作業が五分程度続く。真新しい肉に自生していたハーブを適当に貼り付け、肉の処理が終わった。

「……よし」

呟いて、肉を皮袋の中に入れて、立ち上がる。

刹那、何かの気配を感じ取り、青年はナイフを後ろの木に向けて投げ付けた。

「うわあ!？ お、おいナハト! 僕だ僕! マルスだ!」

気の裏側から聞こえた、声変わりし切っていない青年の声に、ナハト——ナハト・メルクーアは溜息を吐いた。

「こそこそと隠れるな。兎かと思ったぞ」

「この間、正面から出て行ったら切り裂かれそうになった事、忘れてないからな！」

「声を掛ければ良いだろう」

「昔にそれやってナイフが飛んで来たからこうしてるんだ！ どうあっても僕を亡き者にしたいのかお前は！」

「そんなつもりは無いのだがな……」

困ったかのようなナハトの声に、ゆったりとした緑色のローブを纏う青年――マルス・ブルイヤールが、ようやくバスケットを片手にその姿を見せる。

ナハトとは対照的に華奢さと明るい雰囲気漂うが、どこか傲慢な態度が見え隠れしている。

ローブの下は白いゆったりとした学生服を着ていた。品の良いデザインで、胸の金バッジが誇張するように輝いている。

マルスは長い緑色の髪を前に持つてくると木に寄り掛かり、木に突き立ったナイフを抜いてベルトに差し込んでいるナハトに話し掛ける。

「お前、この間買い出しに行くか迷ってただろ？」

「ああ。そう言うお前は魔物に関する研究発表をしに、王都まで行ってきたんだろう？ どうだったんだ？」

「無論完璧さ。見てくれよ！」

そうやって見せて来たのは、宝石の埋め込まれた腕輪だった。

――いや、厳密に分類すれば宝石ではない。

呼吸している空気や魔物、人の体にも、『魔素』と呼ばれるエネルギーが眠っている。

魔素には、炎、水、風、雷、土、光、闇の七種類があり、それぞれ司るのが七精霊なのだ。

研究により、魔素を使い超常現象を起こす『魔術』が生み出された。これを使うには魔素を集める素養が必要不可欠。

そして、魔術発動時に魔素を増幅したり調節したり出来るのが、その腕輪――通称、『魔装具』なのだ。

魔石と呼ばれる魔素の結晶を埋め込み、才能に対応した魔術の補助をする。

マルスの魔装具には、紅い魔石、緑の魔石、白の魔石が嵌め込まれている。つまりは、炎と風、光の魔術を事実上行使出来るのだ。

相性もあるが、過去にマルスは炎と風、そして光との相性がいいと鼻高々に自慢していた。

ちなみに、亜種として魔素を衝撃に変換する効果も併せ持つ物もある。

魔装具は中々貴重で、国直属の役人や軍人、騎士や貴族しか持てない代物だ。

つまりマルスは、国にその学力が認められて、登用される事になったのだろう。

「やったな、マルス。どこに配属だ？」

「聞いて驚くなよ？ 姫様の家庭教師だ！ この僕の学力が素晴らしいのは勿論だが、これは人徳かもしれないな！ お前も一応、国家所属の人間だし、これからも頑張っていこうな！」

「ああ」

ナハトの胸のプレートは国家直属の番人の証で、森のマークは森の番人である事を示している。

波だと海の番人、山だと山の番人と、人目で区別出来るようになっており、番をする土地が危険な程、プレートの質が上がっていく。

ナハトのプレートは、十二種類あるプレートの中で、四番目に危険である事を示すブルーメタルで出来ている。これは相当の腕が無いと、一人では難しい仕事だ。

マルスは木から身を起こし、ナハトを正面から見据えた。

「用は二つあったんだ。一つは一緒に街へ買い物にでも行こうかと思っ。もう一つは、姫様に伝言を頼まれたんだ」

「聞こう」

「『宮廷騎士に戻ってきませんか？』だそうだ」

ナハトは顔を顰め、鬱陶しそうに首を横に振る。

「しつこいな……」

「しつこいって……前にも言われたのか？」

「一月に五通のペースで手紙が来る。最近では紹介のチラシのような物を折り込んである上、姫様直筆での誘い文句も長くなった。成長したのだろうが、迷惑な事この上無い」

「うわぁ……。だが、良いんじゃないか？　ここよりも快適で給料も良いんだろう？」

一瞬何かをナハトは口にしようとしたが、思い留まって溜息を一つ吐いた。

「性に合わない。俺は自分が生活出来ればそれでいいし、割の良いこの仕事を気に入っている。それに俺は、静かな方が好きだ」

「……相変わらず爺むさいな。で、街の方にはいい物はどうか？」

「馬鹿を言うな。俺はあの『魔の森』の番人だ。それこそ、不気味がられるだけだ」

「……関係ないさ。一緒に行こう」

細い手を伸ばして、マルスはナハトの腕を掴む。

振り払うとどうせマルスは転ぶだろうし、必要な物もあった。街へは行かなければならなかった。

「分かった。だから離せ。……安全で早い抜け道を行くぞ」

「頼む。ここは分かり辛いからな」

「六年もいれば、慣れてくる」

「……そんなものか」

鬱蒼と覆い茂る木々を傷付けないように進みながら、ナハト達は街を目指す。

（……マルスとも、結構な付き合いになるな）

何せ、幼少の頃からの友達だ。

互いに得意分野を教えあったりして、子供の頃は過ごしてきた。生まれ育った小さな村では、年が近いのは二人しかいなかった。何をするのも一緒に、二人ともよく笑っていた。

そんな事を思い出しながらしばらく歩いていると、ようやく視界が

開けてきた。

魔の森の入り口があるライトドル平原と呼ばれる草原地帯。

そこには、土が踏み固められて出来た道があり、道中には定期の幌馬車などが遠目に見えたり、小型の魔物が現れたりする。

誰もが通り、大きな木々や建物が無いので見晴らしが良く、森よりはかなり安全だ。魔物に襲われても、運が良ければ冒険者や旅人が加勢してくれる事もある。

そして、ここから街へは更に十分程度歩かねばならないのだが……

「……疲れ過ぎだろう」

「う、うるさい！ あれだけ動き回って、息一つ切らさない、お前が異常なんだ！」

マルスは完全にへばっていた。

艶やかな髪を汗で頬に張り付かせ、呼吸を荒げている。遂には、地面に座り込んでしまった。

「……少し待ってろ。回復の魔術を使うから」

荒げていた呼吸を整え、マルスは目を閉じて集中していく。

「……ささやかなる光の癒しよ。その光の一筋を、我に与えたまえ——」

魔装具が淡く輝き、白光を放つ。その白光を手繰って、魔方陣が描かれていき、

「——ヒール！」

魔方陣が完成すると同時に光がマルスの全身に収束。青い顔をしていたのだが、みるみるうちに血の気を取り戻し、息も既に戻っていた。

「便利だな」

「お前も水と雷、それと闇に相性が良いんだから、魔装具を持てれば似たような術が使えるはずだぞ」

「そうか。しかし、俺にはこれがあるからな」

腰の剣を叩くと、マルスは納得したように頷いた。

「ま、亜種の魔装具でも手に入れば、お前はもっと強くなるよな。」

騎士団長や大将にも勝てるんじゃないか？」

「評価し過ぎだ。俺はただの森の番人に過ぎん」

「でも、元宮廷騎士だろう？」

「もう六年も前の話だ。十九歳となった今では、俺より強いヤツが星の数ほどいるだろう」

「十三で選ばれたと言うのも前代未聞で、今や歴史に残る最年少なんだぞ？ 誇ってもいいんじゃないか？」

「あの頃はドラゴンの繁殖期だった。その所為で戦死者が大勢出なければ、選ばれなかっただろう」

「ああ……あの頃か……」

十一歳の時、二人は違う道を選んだ。

ナハトは騎士に、マルスは歴史学者になる為に道を。騎士養成学校に向かうべく、ナハトは王都へと向かっていた。

立ち寄った街で一泊していると、ドラゴンを偵察していた新米の騎士達がドラゴンを刺激してしまい、その街に襲い掛かってきたのだ。街は王都に近かった為に総力戦となり、ナハトはそこで加勢し、実力を認められた。

ドラゴンは確かに危険だが、重量のある巨躯、強靱な鱗、属性の吐息以外は、そう大して脅威ではない。

騎士の魔術で傷付いた皮膚を切り裂き、確実に仕留めていった。魔装具が無い以上、俗に言う剣術は使えない。一撃で倒す芸当は、王都派遣の騎士でも数人しか使えないようであった。

そして生き残ったのは、ナハトと王都から派遣された騎士が数名。

その時に、騎士の最上位——宮廷騎士の誘いを受けた。

恐らくは人手不足と、暗い話題を払拭する為の話題として。

「お前は何をしていたんだ？」

身を起こして服の汚れを払っていたマルスは、しばし虚空を見上げ、

「十二歳になるまで、試験に備えて勉強してたな」と返した。

呆れ混じりの溜息を吐いて、ナハトは歩き出す。

「ちょ、何でそうなる!？」

「お前はもう少し体を鍛えろ。杖の取り回し方なら教えてやる」

「……確かに。魔術に指向性を持たせるなら、杖が適している。身を守る術も必要になってくるのか。いや、しかし普通の杖だと魔力の伝導率が問題になってくるな……」

考え込んでしまうマルスに、ナハトはもう何も言わずに歩き続けた。互いの存在が辛うじて確認出来る時になって、「ま、待ってくれ!

頼むから置いて行くな!　こら、ナハト!」と言う情けない声が聞こえるのであった。

相変わらず息を乱しているマルス。

王都から少し離れたこの街――ロゼスタの中央にある噴水広場で、ナハト達は休憩を取っていた。

「……ほら、アイスだ」

「す、すまない……」

コーンに乗ったチョコ味のジェラートを手渡し、ナハトも自分のバナラ味の物を食べる。

甘くて濃厚なミルクの風味が口の中を満たし、バナラビーンズの香りが鼻腔を魅了していく。体に染み込んでいた緊張が解れていくのを感じ、それをまた引き締めた。

「……美味しいな」

「ああ。運動の後や頭脳労働後には最高だな。特にチョコの甘さとほろ苦さが絶妙だ。ここのアイスもチョコが一番さ。流石王都発の店舗だな」

「いや、ここはバナラだろう。バナラの香りが自然と心落ち着く。バナラビーンズは魔の森でも採れるからな」

「まあ好き好きって事でいいだろ。早く食べないと溶けてしまう」

そして、せっせとアイスを口に運ぶ二人。

男性同士のカップルだと思われるのか、辺りからは奇異と好奇、更には一部熱っぽい視線が向けられていた。何だか、落ち着かない。マルスはアイスに夢中なのか、早々と食べ終えてしまう。

指に零れたチョコを舐め取りながら、マルスはこちらが食べ終わるのを眺めていた。

「にしても意外だ。甘い物は嫌いかと思っていたが……」

「ゼリーが駄目なだけだ。あの食感は気持ち悪くて食えた物じゃない」

コーンを一気に噛み潰して、ナハトはそう返事を返す。

「そうか？　僕は結構好きだ。食欲が無い時も食べれて、柔らかい物なら崩して飲み物と混ぜれば結構イケるぞ？　つか、お前は好き嫌いが多過ぎだ」

結局は噴水の水を拝借したようで、手を振ってマルスは水を飛ばしている。

飛沫を払い除けながら、ナハトは立ち上がった。

「受け付けない物を克服しようとは思わん。別の方法で補えばいい。

……行くぞ」

行こうとするナハトの腕を掴むマルス。

振り向くと、マルスは悪戯っぽい笑みを浮かべて、先程まで座っていた噴水の縁を指差した。

「まあ、もう少し待ってくれ。もう少しだと思う」

「何がだ」

言った瞬間――

「おい、アレじゃないか！　噂の――」

「きつとそうよ！　軍人様もいらっしゃるし！」

「よっしゃ、始めるか！」

途端に街が祭りのような騒ぎになってしまう。

ナハトは突発的な事態に動揺しかけたが、笑みを浮かべているマルスを見て、その首元を締め上げた。

「ぐあ！？ な、ナハト……ぐ、ぐるじ……！」

「何の騒ぎだ、これは」

「は、な……じ……て……」

窒息してしまいそうなので、開放してやる。

咳き込みながら地面に倒れ、恨みがましい視線を向けた後、溜息を吐いて白状しだす。

「クラルティアの姫様と、ヴェルネツィスの姫様が仲が良いのは知っているだろう？ 数人の配下を連れて、お忍びで来られると言う噂があつてな。真意を確かめにと僕が遣わされたんだ」

「何だ、パシリか」

「ち、違う！ 国王陛下の勅命なんだぞ、これは！ 断じてパシリじゃない！！ ……ほら、見に行くぞ」

舗装された石畳を、さっさとマルスは歩いていってしまふ。

ナハトはそれを追おうとして、足を止めた。

「おい、ナハト？」

「先に行っていてくれ。少し、用がある」

「……？ ああ。いつもの宿屋で待ってる」

「そうしてくれ」

言い残すと、ナハトは人込みに紛れ、裏路地へと走った。

暗い森で狩をする時、直感が物を言う。大型の魔物がうろつくあの森で六年も生きてくれば、感覚を研ぎ澄ます事は容易だ。

歓喜で満ち溢れる雰囲気、殺意が混じれば、それにナハトが気付かない方が可笑しい。

案の定、人相の悪い連中が二人、そこにいた。中途半端に鍛えた体を誇張するかのような薄着だが、統一感のある紅いベストがどこか印象に残る。

こちらを見ると、男の一人が下品な笑いを零し、腰のサーベルを抜いてちらつかせてきた。

「よう、兄ちゃん。こんな薄暗い場所でどうしたんだい？ ここは通れねえよ」

その口調に、ナハトは苦笑する。

「いや何。向こうの軍人とやらは、とんだ間抜けだと思ったただけだ」

「ほー……面白れえなあ。試しに聞かせてくれよ」

サーベルを頬へ向けられても、ナハトは動揺せず、それどころか呆れ混じりの溜息を吐いてみせた。

「精鋭の軍人だろうと、数人だけなら数で押し切れる。しかも、隠密行動必須な少人数でいたのにも拘らず、街人にまでその存在を知られていた。なら当然、大きな山賊組織等が動くだろう。誘拐するには絶好の機会だ」

「……つまり？」

「――助けてやる義理も無い。しかし、俺は一応……国の配下だ」
隠していたブルーメタルのプレートを掲げて見せ、口元に笑みを浮かべる。

「俺は『魔の森』の番人、ナハト・メルクア。その任に就いて六年になる。出来るなら、無用な騒ぎは避けたい。……襲うなら他の街でやってくれ」

その言葉に、男二人は少なからず動揺していた。

無理もない。山賊も恐れる『魔の森』の番を六年も務めて来た人物だ。敵対したいとは思わないだろう。

しかし、連中も引けないのか、距離を取ってサーベルを抜いてみせる。

ナハトも腰の剣とナイフを抜いて、剣を右手で、左手にナイフを逆手で構えた。

「い、行くぜエ！」

「後悔すんなよコラァッ！」

――横薙ぎ、袈裟切り。

瞬時に剣の軌道を見分け、刃でそれに拮抗する。一瞬、金属同士の激突で火花と甲高い音が散った。

二対一の鏖迫り合い。ワザと引いてみせ、体制を崩したところへ左の拳と右の足をそれぞれ鳩尾に叩き込む。

短い悲鳴と共に、一人は気絶し、一人は意識があるのか、ふらつきながらも立ったままだ。

「て、テメェ……手加減、しやがって！」

「……あまり、剣は得意じゃない」

「な、ならなんで剣なんだ！ ふざけやがって！」

ぎこちなく剣を振り上げるが、既にその懐にはナハトが接近し、拳を叩き込んだ後だった。

静かに崩れ落ちる男へ、ナハトは呟く。

「……剣は戦闘に特化して造られた代物だからな。それに、槍では森の中を振り回せないし、斧だと重量で咄嗟に取り回しが利かない。付け加えるなら、これは昔からの愛用品だからな。安心しろ……命は取らない」

気絶した男を路傍に転がし、ナハトは住宅の壁を蹴って屋根に飛び乗った。

——騒ぎはまだ起きていない。

馬車が広場に留まっているのを確認し、屋根の上を駆けた。

恐らく山賊は、広場を囲むように配置をしているはずだ。それならば、護衛対象を守った方が早い。

が、その馬車から青い髪をした華奢な少女が降りて来るのを確認すると同時に、一気に広場がざわつき始めた。

舌を打ちながら、ナハトは加速する。

複数の悲鳴が上がるのを聞きながら、着地の衝撃を恐れずに跳んで広場に降り立つ。

勢いのまま馬車に向かい、そこへ接近しようとしていた紅いベストの男の首筋に手刀を叩き込んだ。

蒼い軍服の男女が少女を馬車に戻して体勢を整えるその横で減速し、彼らと並ぶ。

「だ、誰だ貴様は！」

「『魔の森』の番人、ナハト・メルクーアだ。他、術者一名と共に貴公らに助太刀する。恐らく敵は、この広場を中心に円のような配

置を取っているだろう。馬車を囲むように守った方が効率的だ。敵は紅いベストを着ている」

「すまない。おい、散れ！ 馬車を各人で守るんだ！ ナハト殿、遊撃を頼めるか！」

「承知仕った。どうか御無事で！」

退き、緑のローブが目立つマルスの肩を叩いた。

「マルス、来い」

「ど、どう言う事なんだ！？」

「山賊が来るぞ、紅いベストの奴等だ。街中で炎は拙い。風と光で援護してくれ」

「わ、分かった！」

「……行くぞ！」

腰の剣を引き抜きつつ、叫ぶ。

「皆！ 家の中にいるなら出てくるな！ これより、山賊殲滅戦を開始する。巻き込まれたくなければ、失せろ！」

走りながら、山賊を切り伏せる。

馬車には四人いればいい。自分達が行うべき事は、向かってくる敵を少しでも減らす事。

「……風よ。奔り、その真空の刃をもって切り裂け！ ストレイト・エア！」

ナハトのすぐ横を烈風が駆け抜け、先にいた敵を薙ぎ倒す。

と、屋根の上からマルスを目掛けて山賊が斬り掛かって来る。――が、飛来した大型のナイフに武器を弾かれ、無様に転がった。ナハトの投擲だ。

続けて凄まじい速度で石がその山賊に激突。これも、ナハトの蹴りから放たれた物。

マルスはナイフを投げて渡し、受け取ったナハトはベルトに差し込んで、マルスの腕を掴む。

「上から頼む！」

「ああ、任せておけ！」

振り回して、マルスを屋根の上へと放り投げた。

ナハトはマルスが着地するのを見届けると、馬車へと走った。既に十数人に、取り囲まれている。

が、馬が火花を怖がってか、急に走り出してしまった。

軍人も山賊も戦闘を止めて、それを追い掛けていく。

しかし、馬は途中で暴れ、拘束具を壊し、逃走。車だけが残る。

そこから、少女が一人のこのこと出てきてしまった。

軍人の隊長らしき女性が、こちらに接近してくる。

「悔しいが、貴方が一番腕が立つ。これを……」

手渡されたのは、リングの形状の魔装具だ。首から提げるタイプになっており、その穴には青の魔石と紫の魔石が埋め込まれてある。

つまり、水と雷だ。

「亜種の魔装具だ。頼む、姫様を王都まで送ってはくれないだろうか？」

「……これが代価か？」

「せめてもの誠意だ。すまない。貴殿にも番人の仕事が……」

「いや、構わない。国家の為が最優先だ。それと、伝言を。白いローブの術者に、『王都で待っている』と頼みたい」

「分かった。我々も、この戦闘が終わり次第王都へ向かう。……武運を」

「そちらもどうか無事で。心遣い、感謝する」

受け取って紐を腕に巻きつけて、速度を上げた。

（まず、魔素を集める）

少女へと殺到する山賊達へ、走りながら剣を振り翳す。

（……魔素を剣に伝えて——！）

——振り下ろす！

剣の衝撃が、魔素との複合により強烈さを増して山賊達を吹っ飛ばした。

驚いている山賊を視界に捕らえて、続いて水の魔素を剣に集めて、解き放つ。

「水刃！」

圧縮された水の刃が剣の軌跡より飛び出し、山賊を複数巻き込んで打ち上げた。

——昔の感覚だが、使えたようだ。

宮廷騎士にいた頃は、魔装具を使っていた。番人をするにあたって、ナハトから魔装具を返上したのだ。

（不思議と馴染むな……）

体に覚えた充実感に笑みを浮かべながら、更に駆け、蒼い髪の少女を片手で抱き上げた。

「あ、あの！」

「黙れ！　しばらく口を開くな、舌を噛むぞ！」

怒鳴られ、萎縮している姫を確認し、魔石を光らせる。陣を構成し、収束させ、放つ。

「水よ。その波動を具現し、突き抜ける！　ストレイト・アクア！」
魔術は方向性を定めないとならない。

それ自体が飛んでいく魔術なら良いのだが、水を出現させる効果だけでは敵に向かって飛んでいかない。

なので、直線の『ストレイト』、曲線の『レフトライン』、『ライライン』と言う言葉を使って、方向を定めなければならないのだ。訓練により、イメージの通りに放つ事が可能になる。訓練無しで飛ばせるのなら、それは凄まじい才能だ。

その魔術により出現し、路面を駆け抜けていく水の奔流。

追って来る者は足止めを余儀なくされる。より魔力のある魔術師なら、洪水にする事すら容易だと聞くが、ナハトにはこれが精一杯だ。ナハトは市街地を抜け、すぐ隣の雑木林に飛び込む。

山賊は全員街に集結していたようで、上手く裏を突けた。そう思いながら、ひたすらに走る。

草原へ出ると、すぐに方向転換し、西へ向かった。

「ど、どこへ……」

「すぐ近くの村へ行くのは危険です。魔の森近くの廃村で一夜明か

します。翌日に王都リヒトブルグへと向かう算段ですが、自分で歩けますか？」

「は、はい……」

少女をゆっくりと立たせ、改めてその姿を見る。

蒼く長い髪に白い肌。それは間違いなく、ヴェルネツィス王家の血を引く者の証だ。

確か今年で十五歳になったと聞く。クラルティアの姫も同じ年齢なので、多分間違いない。

不安そうに揺れている大きな瞳に、長い睫毛。まだ幼い顔に、容姿悪く言えば国のお飾りである『姫』の役職を務めるには、適任に思える。可憐で清楚そうな外見が、否応にも気品を生み出しているのだろう。

と、その細い腕に光るバングル。四種類の魔石をあしらった物らしく、青と赤と白と黒とが埋められてある。黒は闇だ。

「魔術を行使出来ますか？」

訊くと、彼女は小さく頷いた。

「この平原にも、小型の魔物や群からはぐれた魔物が出てくる可能性が御座います。いざとなれば、援護を」

「あ、あの……！」

「何でしょう」

早足で歩いていた足を止め、少女を見る。

歩調の関係上、走る事を余儀無くされていたのだろう。息を荒げながら、少女は訊ねて来る。

「お、お名前は……？」

その質問に、苛立ちを覚えた。

それどころではない。一刻も早く遠くへ身を隠さねばならないと言うのに。

出掛かった言葉全てを飲み込んで、ナハトは胸のプレートを見せてやる。

「『魔の森』の番人、ナハト・メルクーアです」

「な、何故私を助けて頂けるのですか……？」

「私は一応国家の配下なので、友好国の姫を手助けする義務があります」

「あの……お、怒っていらっしゃるのですか？」

こちらの表情がそう見える上、苛立ちを覚えていた事は本当だ。

「失礼ながら、思慮に欠ける行動に苛立ちを感じております。少人数で隠密行動をするのは結構ですが、それが街の人々にも知れていた。この時点で隠密の意味がありません。それに、馬車も冒険者のような物にして、従者には軍服を止めさせるべきだったかと。あれでは狙って下さいと公言しているようなものです。隠密の努力が欠片も見当たりません」

「ご、御免なさい……でも、どうしても会いたくて――」

「私に言われてもどうしようありません。……人前では、敬語を辞めさせて頂きます。カモフラージュの一環です。明るい好青年を私が演じますので、その妹と言う設定で通しましょう」

「は、はい……御願ひ、します」

「では、向かいましょう」

言いたい事とすべき事を早々と口にし、歩いていく。

「あ……」

今度は、彼女の歩くような早さで。

顔を綻ばせて、少女は笑い掛けた。あどけない、無垢な笑顔だった。

「……私はユングフラウ・ベリエ・メルキュール・ヴェルネツィスと言います。あの、フラウで構いません。これから……よろしく御願ひします」

その笑顔を見て、すぐに顔を前に向ける。

――強い。この状況で笑えるのは、並大抵の精神では出来ないだろう。

素直にそれを認め、ナハトは呟くように言った。

「……王都までですが、御命は保障しますので」

「は、はい！」

——信賴が伝わってくる。

短い。あまりにも短い時間だと言うのに、どうしてそこまで信用出来るのだろうか。

——分からない。

ナハトはそれを歩きながら考えていたが、結局答えは出なかった。

序幕 『魔の森』と番人（後書き）

はい、黒神です。

愚かにもシリーズ追加。書き上げろよ、一作品をよお……。。

機械録のペース配分を多めに。オラトリオとパン屋もぼちぼちと。
他の作品もまた考案中です。

一幕 行き先不安なマスカレード（前書き）

久々の更新です。ちゃ、ちゃんと続いています……よう？
落ち着いてきそうなので、更新の機会も増えそうです。

一幕 行き先不安なマスカレード

三十分程度歩き続け、その廃村へと辿り着く。

形を留めている民家は少なく、木製の十字架が並んで立てられており、廃村と言うよりは墓標のようだとなフラウは感じていた。

ナハトは墓に向けて祈っていく。その表情は陰しく、悲壮感に満ちていた。

疲れて口を開けなかった事もあるが、今のナハトには声を掛けない方がいいと、そう感じる。

フラウもナハトの横に並んで、祈ってみる。

(……どうか、安らかに)

ただ、それだけ。

何があったのかは分からない。なので、そう祈るしかない。

ただ気になるのが、この廃村からは不の念が一切感じられないのだ。人の感情のうねりが、何も無い。静かで、ただ穏やかな。

まるで、波も、潮騒も、鷗の声すらも無い、凪いだ海のように。

と、不意に頭の上に手が乗せられた。

ナハトの手。大きく、硬い……しかし、優しい手だった。

「……ありがとう。少し辺りを見て回ってきますので、どうか……祈っていて下さい」

そのまま、ナハトは森へと消えていく。

腰の剣に手を掛けながら、注意深く辺りを探索していく。火を使う際、匂いで魔物が寄ってくる可能性も否めない。新しい魔物の痕跡があるなら、早急に潰しておくべきだ。

しかし、辺りは山賊に踏み入られた形跡も魔物が迷い込んだ形跡も無い。

念の為に、魔物が嫌う草や薬草、その他食べれる野草や木の実を探して採り、廃村へと戻る。

フラウはまだ、祈っていてくれた。

ただ目を瞑って、祈り続けている彼女に声を掛ける。

「屋根のある所に行きましょう。この雲行きなら、夕方に少し雨が降るでしょうし」

「……はい」

フラウがゆつくりと立ち上がるのを確認し、ナハトはそのまま屋根のある廃屋へと向かった。

家の中には、古い薪が大量にあった。昔、樵だった者の家だ。

ドアが破れ、壁が半壊している。それでも、まだマシな方。痕跡も残っていない建物すらあるのだから。

ナハトは馴れた手つきで薪を組み上げ、木の繊維を解してから火打石を取り出す。

が、それをフラウは遮った。

「……闇より出る炎よ。その妖しく輝き揺れるそなたを今、具現する。イグニス」

赤い魔石と黒い魔石が輝きを発する。

——確か、二つの魔素を併せて使う、高等魔術の初歩だったか。

赤黒い炎が彼女の掌の上で形を取り、フラウはそれを薪の上に落とす。

すると、一瞬で薪が燃え上がり、炎が安定する。絶妙な火力の調節だ。ここまで細かいコントロールは、流石にナハトも出来ない。

「魔術を操る事に長けていらっしやいますね。流石です」

「い、いえ……。そ、それと、私なんかに敬語を使わなくてもいいですよ？ 私も……。その、畏まっちゃいますし」

「……そうか。すまない、助かる。敬語はどうにも好かん」

幾分か、張り詰めていた気分が楽になる。

「……その口調も、元からなんですか？」

「これも止めた方が良いか？」

「出来れば。その……ちょっと、怖いので……」

その一言で、ナハトの周りに漂っていた重い雰囲気が一気に失せた。目を白黒させているフラウ。無理もないだろう。ナハトは先程とは

別人のような優しい笑みを浮かべていたのだ。

ただ穏やかな、老人のような眼差し。もう彼は、仕事に忠実だった堅物の青年ではないのは確かだ。

「……ごめんね。侮られないように、普段はああしているんだ。普段からやっておかないと、ボロが出ちゃうからね。怖がらせちゃつて、ごめん。……ああ、驚くよね。ごめん」

謝ってばかり。そんな彼に、やはり驚きが勝ってしまう。

相変わらず驚いている様子のフランに構わず、皮袋からホワイトウルフの肉を取り出し、薪を細くした串に刺していく。

火を通さなくてはならない木の実も串に刺して、それらを直火で焼いていく。焼けていくと、次第に防腐の為でもある香草のスパイス——な匂いが、小屋に満ちていった。

空腹を思い出したかの、彼女の方からお腹が鳴る音が聞こえる。

恥ずかしそうに俯く彼女に、ナハトは思わず苦笑した。

「ご、ごめんなさい……」

「うん。待ってて、すぐ焼けるよ」

その笑顔はどこか中性的で、フラウは一瞬だが胸が高鳴った。

こんな無防備な笑顔は、初めて見る。

いつも、笑顔を貼り付けたかのような家族、貴族、友人、従者。

誰もが笑みでいて、誰もが心で笑っていなかった。

だから、怖かった。

その中で唯一、クラルティアの姫様——リユンヌ様だけは違っていた。

裏表無く笑って、私を安心させてくれた。あの笑顔はまさに光の姫君に相応しいと、そう思う。

と、気付けば目の前に良い匂いを放つ肉の串がある。

差し出しているナハトは、確かに裏の無い柔らかな笑みを浮かべていた。

「先にどうかな？　こう言う温かいご飯は、姫なら食べられないからね」

「え……？ な、何で……？」

「僕は、一応元宮廷騎士だからね。国の内部にはそこそこ詳しいんだ」

元宮廷騎士だと言うナハト。その目は、何故だか自嘲気味で、疑問が浮かんだ。

「……どうして、辞められてしまったのですか？」

肉を受け取りそう返すと、ナハトは苦笑いをしてしまう。

「ええっと……と言ったら良いのかな。現状に嫌気が差したからだよ」

更に焼けた肉を自分で食べながら、ナハトは力無く笑った。新進気鋭の若者が多い水の国や光の国で、こうも穏やかな顔をしている人物はそういない。していて、それこそ老人だろう。

だからなのか、彼の印象は——無骨な役人から、枯れた青年へと変わる。

そんな青年がふと真面目な顔をし、虚空を見上げる。

「守るものに優先順位を付けなくちゃいけない。だけど、僕の優先順位と国の優先順位が違ったんだ。だから、僕は騎士を辞めて、静かな森で暮らしていた。尻尾を巻いて逃げ出したって言った方が、正しいんだけどね」

「……守るもの？」

「大切なものさ。……いや、大切なものだったんだ。聞きたいかい？」

その言葉に、フラウは首を横に振った。

——ナハトの目が、悲しみに暮れているのを見てしまったから。

彼は優しくフラウの頭を撫でる。

「……僕は脆い人間だよ。けど、君を絶対に姫様のところに送り届けて見せるから」

そう肉を一口で食べ、笑った彼に、フラウは確かな安心感を抱いたのだった。

「あー……もうっ！ 何で返事すら来ないのよ！」

苛立たしげな声が、広い部屋で木霊した。

むやみやたらに広く、清潔感のある部屋。床は大理石、壁は高級感溢れる白で塗られ、家具も白で統一されている。

その一室の中でもとりわけ目立つ、無駄に広い天蓋のついたベッドに寝そべって、金髪碧眼の少女が頬を膨らませていた。

ベッドの傍らには、グレープ色の髪をした、淑やかそうな女性が佇んでいる。黒い厚手のワンピース、腰の兼帯には剣が吊るされ、白色のブーツとマントが特徴的だった。

が、それもワンピースの胸に刺繍されてある薔薇の刻印よりは目立たない。

異様に目立つ紅。それが何を意味するのかは、騎士内部でしか理解されない。逆にそれは、騎士内部での地位は確立されていると言う事。

少女のリアクションに、真紅の大きな瞳を開いてから、女性は溜息混じりに苦笑してみせる。

「まーたフラれたんですか、姫。ですから、送っても無駄ですって」

「何でよ！ 私からの誘いのよ！？ 断る方がおかしいわ！」

「そりゃそうなんですけど、彼の過去を知らないわけじゃないですよ。宮廷騎士なんて、ぶっちゃけ貴族の使いっパシリみたいなもんじゃないですか。私も御免ですしね」

そう言って肩を竦めた女性を睨みつけ、少女は吼える。さながら、その様は子犬のようだ。

「……でも！ ナハトじゃないと駄目なのよ！」

「随分と惚れこんでますねえ。まあ、だから水の国のお姫様と相

談なさるんでしょ？」

「うん。あの子、この私より頭がいいから」

偉そうな少女は反面、素直な面もあるようだった。他人の実力を肯定し、それを尊重、重用するべきだと自然に理解している。これは中々、出来る芸当ではない。

と、荒々しいノックが飛び込んでくる。

「どうぞ」

少女の一言に、派手な音を立てて豪華なドアが開かれた。

女性と同じ格好の上から、動きを阻害しない最低限の防具をつけた女性の騎士だ。彼女は一礼し、矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。

「で、伝令を申し上げます！ たった今、街で聞いた話なので信憑性に欠けるとは思いますが……」

「貴女の感想はどうでもいいわ。早く言いなさい」

「は、はい！ 実は……」

一呼吸置いて、騎士の女性は一言だけを呟いた。

「————水の国の姫様が、襲撃に遭いました」

「……はぁッ!？」

それは、二人を仰天させるには、十分な言葉だった。

「——水撃！」

廃村で一夜明かし、『魔の森』から離れて、ナハト達は街道を行く。『魔の森』の番人。そう明かしたのは、自分と行動を共にしているであろう事を知らしめる為。そうすれば、滅多な事では寄って来ないし、もしそうだとしても護送の為に『魔の森』へと逃げ込んだと思わせる事が出来る。

それに、髪を結び、身形を整えれば、ナハトも普通の青年と何ら遜

色ない。

普段なら目の前にちらつく髪。今はそれが無いので落ち着かないが、しばらくの辛抱だろう。

そして、街道を行っても魔物は出現する。

目の前には複数の魔物——下級で、危険度Eのブルーウルフが四体。駆け出しの冒険者なら逃走も念頭に置く数だが、ナハトにとっては狩り慣れた数だ。最悪、危険度Aのフレア・ワイバーンの群れとも戦った事があるナハトにとって、こんなものは軽い。

だが、『魔の森』で腕が鈍ってしまったのだろう。強い剣術や魔術は出せそうに無い。

それでも、目の前の連中には十分過ぎるが。

「瞬雷ッ！」

呼気に呼応し、剣に伝達していた魔力が形成し、流出する。

蒼雷はただ一時激しく音を奏で、閃光のような輝きを剣に与える。

帯電した刃は青白く、時折空気との摩擦によってか、火花が散っていた。

その剣を一閃。剣術……『水翔撃』で打ち上げたブルーウルフ以外の敵を、雷の刃は瞬時に焼き切った。肉が焦げる何とも言い難い不快な臭いが、辺りに立ちこめる。

ナハトは剣を上空に掲げ、そのまま待機。——刹那、落下したブルーウルフを剣は貫いた。

剣を払い、ブルーウルフの死骸を草原に除ける。魔物は手早く分解されてしまうので、肉などはすぐに解体しなければならない。家畜とかはそうでないのだが、魔物の中にある強い魔素が関係しているのだと言う。本当かどうかは知らないが。

詠唱を中断し、こちらに駆け寄ってくるフラウ。感心したらしく、ただただ口を開いてナハトを見上げていた。

「す、凄いです……！　今の、ブルーウルフですよ？　水の国にもいますよ！」

はしゃぐフラウに、鋭い表情を緩め、苦笑するナハト。

「どこにでもいるからね、ウルフは。それと一つ教えておくよ。草原の魔物は、刺激しなければ滅多に襲ってこない。だから、大声は極力避けた方がいいんだ」

「でも、さっき大声を……」

「ああ……魔物は魔素のぶつかり合いに敏感なんだよ。だから、戦闘が始まれば寄ってこないんだ」

「そうなんですか……」

これも聞いた話でしかないが、マルスもそう言っていた。間違いはないと思うが、真実は良く分からない。

血を拭った剣を収め、再び歩き出す。

魔物の襲撃はこれで二度目。歩き続ければ、宵頃には着くだろうけれども、それは休み無く歩き続けてだ。なので、一日余裕を持った方がいいだろう。

そう思いつつ歩を進めていく。

そして、昼を少し過ぎた頃だろうか。王都に近い街を発見。ここは……アウディールだったか。騎士の駐屯場所の一つでもある。

——そうだ！ 馬車を捕まえられるかもしれない！

「フラウ、馬車に乗れるかもしれないよ」

「ほ、本当ですか!？」

何だかんだ言いながら、彼女も辛かったに違いない。

城の移動ぐらいなもので、こんな長時間、慣れない外での徒歩は経験していないだろう。いくら貴族用の軽装と言っても、旅を想定して作られたものではないし、何より心持が違う。早く安心させてやりたい。

「他の騎士に、僕は威圧的な態度を取るけど……驚かないでね」

「は、はい」

彼女を連れて街に入ろうとした——刹那、

「うわああああああッ!？」

短い悲鳴と共に、何か爆発音が轟いた。

二幕 騎士として

――爆発。

この現象が起こる際、考えられる事は二つ。

一つは、単純に火薬へと引火したか。大きいものであれば、家屋を一つ吹っ飛ばすくらいは造作も無い。

ただ、火薬は非常に高価な上、国での携帯許可がないと、音から察する規模の火薬は使えないのだ。なので、それは除外する。

もう一つは、炎系の魔術を使い、爆発を引き起こしたと言う線だ。

強力な術者は、恐らくだがこの街一つを詠唱での大魔術で吹っ飛ばせる。

しかし、強力な術者なんて、それこそ火薬よりも珍しい。

マルスやナハトが使う魔術は下級のもの。ストレイトなどの指向性を持つ言葉を入れないとならない、教本魔術。

中級術からは出現場所がある程度は自分で操れるらしい。ただ少し長い詠唱が必要で、すぐに発動出来ないと言う短所がある。その分、威力は大きい。

範囲攻撃か一点集中攻撃かで、また威力も違ってくるが、下級術よりは全てにおいて勝っているだろう。

見聞きしたことある呪文で、中級術の風系『スラッシュゲイル』、上級術の『フラマ・グラディウス』、及び『フェゴ・トリエンタ』。後ろ二つはどちらも炎系。

『フラマ・グラディウス』は巨大な炎剣を創造し、相手を内側と外側、両面から灰にしていく単体攻撃術。

『フェゴ・トリエンタ』は風系との複合で、火炎を纏う竜巻を生み出し、熱風で範囲攻撃をする。全てが氷竜襲撃の際、最年少の大魔術師、ルミナ・フェリシタルが行使したものだ。

どちらにせよ、今の威力は下級術ではない。

街へと駆け出そうとするフラウを手で制し、ナハトはゆっくりと歩

いて行く。

「フラウ、僕の傍に。何があったかは分からないけど、魔術師だ。
反王国者だと拙いから、離れないでね」

「は、はい。えっと……反王国者だと、拙いんですか？」

「王国を嫌うものを、総じてそう呼ぶことは知っているよね？」

「はい」

「うん。魔術師は普通、他人を下に見ている。選ばれた才能者だからね、無理もないよ。反王国者は一度、王国に召抱えられていた騎士や魔術師が主なんだ。要は、連中は逆恨みして、騎士達や平和に暮らしている人々などの妨害をしてやろうと考えてるのさ」

「詳しいんですね……」

「誘いが来たしね」

「ええええっ!？」

さりととんでもない事を呟いたナハトに、フラウは驚愕を隠しきれない。

疲れたように笑って、ナハトは肩を竦めた。

「ある任務の後に、僕は騎士を辞めた。その時に一緒に辞めさせられた僕の上司が、誘いに来たんだよ。勿論、断ったけれどね」

「何で……辞めさせられたんですか？」

「騎士である以上、国王の命令には絶対なんだ。その時に、あの人は独断で動き、様々な人を助けた。けれども……与えられた任務は貴族の護衛。意味は、分かるよね？」

フラウは頷く。

護衛対象が貴族なら、町とか村の人を放って、貴族を守るのが上位の騎士だ。そう言う貴族は、護って貰って当たり前となってしまうので、怒る。大貴族なら、代表の申し立てで騎士をクビにするくらい、どうって事も無いだろう。

「あの人は強い人だった。平民の出なのに、頑張って宮廷騎士団副隊長にまで成り上がったんだ。けれどね、王国は……命令違反で追放となった彼の村に、火を掛けたんだ。丁度、反王国者がいると噂

があつたからね」

「そんな……！」

「その反王国者と一緒に追っ手を撃退して、反王国者になったらいいんだ。で、国王が病死したと言う事になっているけど、本当は暗殺された。僕の上司にね」

「じ、じゃあ！ リュンヌ様はその事を……！」

「知っているよ。だから、信用できる人間を傍に置いておきたいんだろうね。今の今まで、僕にも催促の手紙が来ていたよ」

焦げたような臭いを辿りながら、ナハトは淡々とそう返してくる。だとしたら、フラウは分からなくなった。

彼女が――リュンヌがどれだけ心細いか。それを知りながら、何故……彼は栄誉ある宮廷騎士の誘いを蹴り続けていたのか。

それを聞こうと口を開いた瞬間、ナハトの手がフラウの口を覆った。

「静かに。……誰かがいる」

こっそりと建物の影から覗いて見る。

青いフード。派手な剣の紋章が金糸で刺繍されたそれは、良く見慣れていたものだった。

（巡回騎士の魔術師用ローブか……？）

師範となる騎士と他の数名で各地を旅し、見聞を深めて、事件を解決。そして街在中の騎士から印と証書を貰い、それを五つ集めて戻ってくる。それが騎士巡回だ。それを行っている見習い――従騎士を俗に巡回騎士と呼ぶのだ。

巡回騎士は剣の刺繍が入った青色の軽装を纏う。それが慣^{なら}わしで、王が代わろうともそれは変わらない。

しかし、どうにも様子がおかしい。

耳に意識を集中し、遠くからの話し声を聞いてみる。

「――だから、救援は出せんだ！」

「何ですか！ この近辺でロックボアの群れが出たんですよ！？ 巡回騎士全員でも、潰せません！ 救援を！」

いい加減、うんざりしたような中年男性の声。次いで、まだハスキ

―な声をしている少年声が耳朵を打つ。

男性の方は緑色の駐屯騎士用装備をしている。胸当てには、長を表す羽の刻印があった。

「群れといっても、十匹ぐらいだろう！とにかく、出せんだ！上からの命令で、部署を離れるわけにはいかん！元騎士で今は番人をしているナハト殿が来るはずだと、通達があったんだ！」

「ハッ！どうせそいつも腰抜けなんでしょう！？この街には代えられませんよ！」

それを聞いてその中年騎士は、とうとうその少年を殴りつけた。地面を転がる少年を見てフラウが小さい悲鳴を上げるが、無視。観察を続ける。

「黙らんか！この街をかつて救ったのも、まだ少年だったナハト殿だったのだぞ！」

「でもその人はもういないんでしょう！？騎士の役目を捨てて逃げた臆病者なんか待ってないで、さっさと救援に来てくださいよ！」――聞くに堪えず、ナハトは少年へと歩んで、その胸倉を掴み上げた。

威勢良く睨み付けているが、少し恐怖もあるらしい。仔犬のように彼は吼えてみせる。

「な、何ですか！」

「何故、貴様は何もしない」

鋭い一言に、歩き出そうとしていたフラウの足が止まる。

「恐らく救援を頼まれたのだろうが、それならば酒場に溜まっているキャラバン所属の冒険者連中に助けを乞うべきだ。金を払えば、何でもやってもらえる」

「誰が！あんな誇りもプライドも無い冒険者なんか……っ！」

「なら貴様は、自分の矮小なプライドでこの街を危険に晒すんだな？」

冷たく、ナハトは言い放つ。

フラウは先程までとは別人のナハトの雰囲気気圧される。侮られ

ないように磨かれた威圧的な態度は、確実に少年を怯えさせていた。

「貴様は恐らく、騎士の精神が大事なのだろう。自分が騎士だと言う事に酔っているだけだ。騎士団が王国所属である以上、役人や国の為と命令の色は強い。だがな、騎士団は人々の暮らしを助ける為に発足されたものだ。例えばそれが、国王の忠義に反しようとも……国民の為にあるのが、騎士の姿だと俺は思うが」

その少年を突き飛ばすように地面へと放り、ナハトは気圧されている中年騎士に一礼してみせる。

「『魔の森』の番人、ナハト・メルクーアだ。噂が聞こえたのでやってきたのだが……面倒事らしいな」

中年騎士は名前を聞いた瞬間、跪く。ナハトの部下のように、その挙動には一切の迷いは無い。身分は、駐屯騎士長の方が高いというのに。

少年は地面を嘗めながら、悟った。あそこまで人に信頼されると、もう身分ではない。尊敬する人物に敬意を払い、守るべき者に愛される行動をしてこそ、騎士なのだ。

「ナハト様！ お久しゅう御座います！」

「様は止せ、身分も貴殿の方が上だ。普通なら、俺の暴言を咎めるべきだろう」

「知りませぬ！ 私の心の中では、あの絶望的な状況で無関係な私達の為に戦って下さった、あのナハト様で御座います！」

ナハトは無骨な表情に苦笑を浮かべ、フラウを手招く。

「――ひゃあっ!？」

とことこと歩いてくる彼女を右肩に担ぎ、

「うわあっ!？」

少年を左肩に担いだ。

「厄介事は俺が行けば済む。その間に、王都までの馬車を準備願いたい……」

「勿論で御座います！ 理由から……そうですね、民間の馬車で拵えておきましょう！」

「聡明な判断、感謝する」

駆け出して行くナハト。二人担いでいると言うのに、そのスピードは馬にも匹敵するようだ。

ナハトに怯えていた騎士の少年は、恐る恐るといった様子で訊ねてくる。

「何ですか？ 貴方は騎士が嫌だから、辞めたんでしょう？」

「俺は一応、役人だ。国の面倒事に加担する義務がある。それに街の人には昔、良くして貰った。義理は通す」

あっという間に街の外に出て、少年の誘導に従って更に走って行く。草原には剣の音が木霊している。ロックボアは岩の表皮が特徴的な猪系の魔物だ、バカ正直に切り掛かっても弾かれるだけだろう。

想像通り、思い思いに切り掛かる従騎士の姿があった。

「援護を頼めるか、フラウ」

「は、はい！ 頑張ります！」

立ち止まってフラウと少年を降ろし、十数匹はいるだろうロックボアをナハトは睨みつける。

と、その少年は拳を握り締め、ナハトに向かって叫ぶ。まるで、自分を奮い立たせるかのよう。

「僕も……僕にも、手伝わせてください！」

その心意気にナハトは頷き、駆け出していく。

「フラウ、水系だ。ロックボアの表皮が少し柔らかくなる。貴様……」

「ロウ・サタヌスです！」

「ロウ、貴様は何系を行使できる？」

「炎と土です！」

「よし、土系で岩の槍を出す下級術があったな？ あれで攻撃だ」「えっ！？ で、ですが！ 炎と岩はロックボアには……」

「術を上手く使い、そして魔物を知れ。転倒させて、剣士には腹を狙わせる。岩が覆われていない唯一の部分だ」

言い放ち、速度を上げて集団に切り込んで行く。

水の魔素を剣に集中し、地面を這うように回転しながら剣術を放つ。

「――『水蓮花』ッ！」

地面から溢れる大量の大水。足を取られ、ロックボアは横転、または背中を地面にぶつけ、結果動かなくなる。

その隙に隊長格へと寄り、会話を飛ばす。

「助太刀する。『魔の森』の番人、ナハト・メルクーアだ」

「すまない！ 巡回騎士長、及び下級遊撃騎士第二班長のロック・ナックだ。あんた一人か？」

「俺一人で充分だ。しかし、貴様らは経験不足だな。腹を狙え、好機だぞ。水を被った奴なら、その大剣で押し切れる」

「ああッ！ おいお前ら！ 腹を狙え！ 起きてる奴も、何とかして転ばせろ！」

素早く鋭い指示に、戸惑いながらも従騎士は動く。

そこへフラウのストレイト・アクアだろう。一直線に飛来した水流がロックボアを打ち倒し、その水圧で仕留めてしまった。

ロウの魔術も中々で、次々に起き上がりとしていた連中の動きを阻害している。コントロールが良く出来ているらしい。

ナハトも駆け出し、三匹を同時に屠る。素早く描かれる斬線に、手を止めてこちらを見る者まで出始めた。

無視し、水も被っていないロックボアの突進を避けつつ、横風ぎに切り裂いた。岩を打つ手応えだが、破壊してしまえば後は勢いのままだ。

その数分後には、ロックボアの死骸が群れて転がり、片っ端から無くなっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733r/>

薔薇十字の騎士団 —Verweile doch, du bist so schön.—

2011年10月7日20時42分発行